

生徒理解及び生徒支援のあり方について

春野町立春野中学校 教諭 山本 瑞

1 はじめに

いじめや不登校、非行やきれる子ども、・・・など、思春期の中学生にかかわる問題は多く、我々教師が日々現場でかかわっていても、生徒の内面にある心の問題を把握することが難しくなっている。そこで、それらの問題行動の発生を予測したり、発生を抑制したりする、予防的な取組が必要になっている。子どもが不登校になると、学校復帰までかなりの時間を要する。しかし、早期に予防的な取組をしていけば、不登校まで追い込まれなくてもすんだという事例は多い。表面化されない心の問題をどのような方法で、早期に把握できるようにするか、どのような取組をすれば、予防でき、今後の学級経営や生徒理解、生徒支援などに生かせるのか、研究を進めることにした。

2 研究目的

本研究では、Q-Uによる学級適応感と、S-HTPにおける課題解決態様をあわせて評価することで、生徒や学級の実態を分析し、生徒の学級における適応課題を発見することができるのではないかと考えた。そこで、今回は、昨年度に研究された、生徒支援システムをもとに、従来の研究に、さらに整理方法・分析方法の研究を重ねることで、学級や個々の生徒のアセスメントを行い、明らかにされた課題に、学校として、学級担任として、何をなすべきかを探り、指導・支援方法を検討する。その後、実際の学級運営に導入し、その効果を検証することにした。

3 研究内容

(1) 生徒支援システム

調査内容

ア 楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」

学校・学級生活への不適応、不登校、いじめ被害の可能性の高い子どもを早期に発見できる。これにより、学級集団の状態の分析と生徒の実態をみることができ、子どもたちへの対応、学級集団への対応の指針の情報が得られる。

イ 描画テスト「S-HTP」

臨床心理学における投影法に属する描画法の心理テストの一つで、人格診断技法であるHTPを基本として、家と木と人の三つの課題を一枚の絵に統合させるという新しい観点を追加した実験的なテストである。投影法テストは、自己評定法では知ることができない、本人も気づかないパーソナリティーの傾向や、深層心理を探りうる可能性があるという長所を持つが、整理法や解釈が難しく、評価者の臨床経験や技量に大きく左右されるなどの課題がある。この描画を、昨年度までの研究された分類パターン(プラス=健康的な描画、マイナス=何らかの問題を抱えていると予想される描画)を活用することによって、個々の生徒理解や困難な問題を抱えている生徒を発見できる。

実施時期

1回目：6月～7月 2回目：11月～1月

実施方法

* 1時間の授業で、「Q-U」と描画テスト「S-HTP」を実施する。

* 準備物 ・楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」

・ケント紙（A4サイズ）1枚、HB鉛筆2本、消しゴム

* S-HTP 教示：「家と木と人を入れて何でも好きな絵を描いてください。」
「裏に書きたいことがあれば何でも書いてください。」

留意点（指示）・用紙は横に使用し、時間は自由であるが約20分前後が適当。

- ・絵の上手下手を見るのではない。いい加減ではなくできるだけ丁寧に描く。
- ・写生のように何本も線を描かない。さしは使用しない。
- ・隣の人の絵を見たり邪魔をしたりしない。

整理方法

ア 「Q-U」

分類：「承認得点」と「被侵害・不適応得点」の2つの得点から次の4つの群に分ける。
学級生活満足群・非承認群・侵害行為認知群・学級生活不満足群(要支援群)

分類：個人別の学校生活意欲を5領域に分ける。

友人との関係・学習意欲・教師との関係・学級との関係・進路関係

イ 「S-HTP」

分類：昨年度の研究生が作成した6領域を参考に、プラス・マイナスに分類し、内面の問題を捉える尺度を作った。空想の描画は、空想をプラスに、空想をマイナスとし、さらに細かく分類し、支援方法をまとめた。(表2・3参照)

分析・考察方法

ア Q-U、S-HTPの結果をまとめ、それぞれから個人、学級、学年での状態(実態)を把握する。

イ Q-Uの結果のプロット図とS-HTPの結果の組み合わせ図から、学級、個人の実態を把握する。

- ・Q-Uの結果のプロット図にS-HTPの結果を組み合わせ、図をつくる。(図1参照)
- ・全体での支援と個別での支援を判断する。(問題解決への取組)
- ・不満足群の中でも、「+」の描画と「-」の描画での抱えている問題の違いに気づく。
- ・満足群の中でも「-」の描画から支援の手がかりを見つける。
- ・Q-Uに対し適応しようとする気持ちが優先したり、適応しているように見せかけたい生徒への対応策を考える。
- ・個別支援やチーム支援の必要な生徒を発見する。

指導・支援の方法

ア 学級・学年・学校での取組案を検討する。

- ・結果のまとめと学級担任からの「事例提供」を分析し、今後の課題を検討する。
- ・学級指導と個々の生徒への具体的な指導・支援のあり方を検討する。(予防的に)
- ・学校組織、学年組織として研究・研修など計画的に進める。

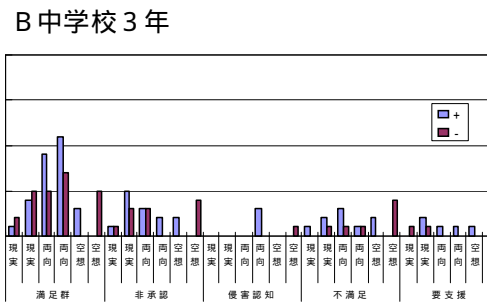
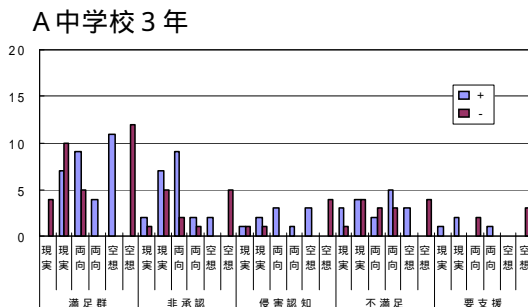
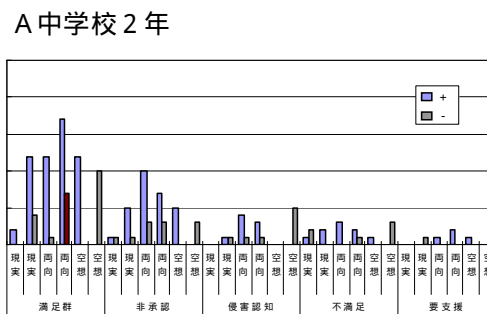
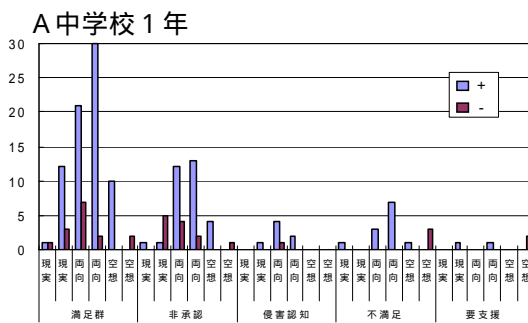
検討案をもとに、学級活動や授業・諸活動で実践後、2回目の調査を行い、1回目の結果と比較検討し、検証する。

(2) 実践研究

対象 A中学校：1年生 160名、2年生 159名、3年生 157名、計 476名(12学級)
B中学校：3年生 120名(3学級)

1回目・Q-U、S-HTPの結果

学年別のグラフ(グラフ1)では、1年生で、満足群に両向の描画が多く、素直で明るい雰囲気
の描画であり、非承認群で、マイナスの描画が多くなっているが、空想やマイナスの描画は
あまり出現していない。2年生では、満足群にマイナスの描画が増えているが、全体的には、現
実や両向、空想の描画が多く、侵害認知群や不満足群に空想やマイナスの描画が出



<グラフ1. 学年別 Q-U・S-HTP組合せ集計>

現している。3年生では、A・B中学校とも、満足群に空想 やマイナスの描画が多く出現したり、非承認群や不満足群、要支援群の割合が高く、マイナスの描画が多くなっていることから、個々の描画と併せて適切な支援のあり方を探る必要がある。

組み合わせプロット図の結果からは、プロットが縦伸びの学級が多く、ルールが守られ落ち着いた生活が送れているが、学級の中で承認されている者と、そうでない者との階層化が見られ、学級の中のリレーションが弱い状態が窺われた。また、学年があがるとともに承認得点の低い生徒が多く、進路や友達関係で悩んでいる生徒や、自己肯定感の低い生徒なども見られた。また、満足群から不満足群にかけて階層化している学級も見られ、個別支援の必要な状況が確認できた。



確認できた。

また、描画からは、満足群に属している生徒の中にマイナスの描画があり、学級の中であまり目立たないが、内面に問題やストレスを抱えていると思われる生徒があり、支援の必要な生徒が確認された。(描画1)の不満足群で、空想 C (-)の生徒からは、自分の世界を持ち自由に表現できる力をもっているが、素直に周りに合わせて対応できない様子が窺われる。(描画2)の満足群で、空想 D (-)の生徒からは、孤独や寂しさなど内面にある暗さが感じられ、メッセージからもそれが窺われた。(描画3)の不満足群で、両向の生徒からは、一人で孤独な感じは受けるが、家も大きく窓も開いてオープンな感じであり、学級生活には不満足で、仲間とのかかわりは苦手だが、自分の世界で落ち着いていることが予想され、個々の描画から支援の手がかりを見つけることができた。

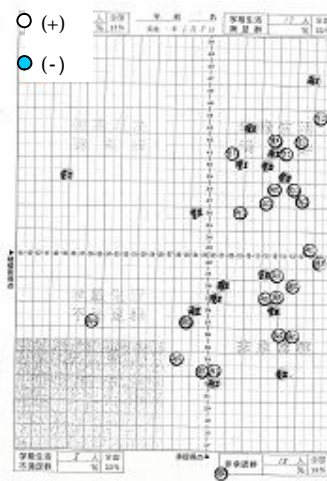


図1. 組合せプロット図

取組

A、B中学校とも、学年会で、Q-U、S-HTPの見方について確認し、結果から、担任より学級の実態や気になる生徒など事例提供が出された。その後、学年団での討議が行われ、日々の取組としての学習規律も含め、今後の方針を検討した。学級全体で取り組めることとしては、特活や道徳の時間を利用し、学年単位で構成的グループエンカウンターによる夏休み明けの人間関係づくりや、体育祭や文化祭の行事へ向けての取組方や振り返りの時間等をもち、学級内でお互いに認め合ったり自己表現ができる内容や、学級の雰囲気をよくする内容を計画し、学級内や担任教師との人間関係作りに努めるなど、学級の実態に応じて取り組むこととした。(表1)

また、個人的な支援としては、気になる結果の生徒を学年団の教師で確認しあい、心配なことや困っていること等がないかどうか、教育相談的な時間をとったり、係活動を勧めたり、日記などで励ましや声かけを心がけることにした。

表1 . A中学校でのGWT・SGEの計画

	1年	2年	3年
一学期	学年全体でのレク(4月初) 集団宿泊訓練でのGWT 自分たちの問題を考えよう ぼくらの先生	PR大作戦	ぼくらの編集室 謎のマラソンランナー 気になる自画像 向いているのはどんな人
二学期	ひと夏の経験 君はどこかでヒーロー (体育祭編)(分化祭編)	ごちゃまぜビンゴ 君はどこかでヒーロー (体育祭編)(分化祭編) 人間コピー ピアサポート・話の聞き方	ひと夏の経験 君はどこかでヒーロー (体育祭編)(分化祭編) 先生ばかりが住むマンション 私は面接官
三学期	ごちゃまぜビンゴ	さいころトーキング 意外なあなたを発見(修学旅行) 私が学校に行く理由	さいころトーキング 別れの花束

2回目・Q-U、S-HTPの結果と比較分析

A中学校では11月に、B中学校では1月に、前回と同様の学級で行い、テスト結果の比較研究を行った。学年別にまとめたグラフでは、満足群の生徒が増え、全体的に暗く寂しいマイナスの描画が減り、現実や両向(+)の明るい雰囲気の描画が増えた。学年ごとのマイナスの描画の減少は、A中学校では、1年、5名、2年、11名、3年、23名で、B中学校3年では10名だった。空想(-)が少し増えている学年もあるが、内訳を見ると、Aタイプの破壊的・攻撃的な描画は減り、BやDタイプの描画が多くなっている。これは、A中学校1年とB中学校3年は今年初めてのテストであったため、1回目のテストでは自己防衛が働き、2回目で本来の姿が出せたことが考えられる。また、3年生では時期的に進路などへの不安が増したためではないかと考えられた。

組み合わせプロット図からは、全体的にプロットの1年では、非承認群や不満足群から、満足群へ変化している生徒が増え、プロット図での分散が少なくなりマイナスの描画が減った。2年では、侵害認知群が減り、不満足群のマイナスの描画も減った。3年では、プロット図の位置はあまり変化していない学級もあるが、全体的に承認得点が上がり、マイナスからプラス

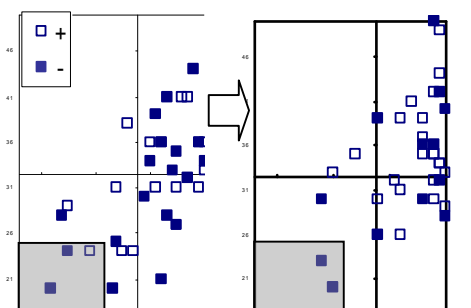


図2 . 組み合わせプロット図 比較

の描画に変化している生徒が多い。(図2)また、満足群のマイナスの描画が減り、プラスの両向型や現実の描画が増えた。学級別に見ると、支援が必要だった生徒が、群の移動はなくても、プラスの描画になったり、承認得点が上り被害得点が下がっている場合が多く、学級生活の中での不安が緩和された状態が伺えた。また、要支援群や不満足群にいた3年生で、プラスの描画だった生徒は、A中学校では20人中14人が、B中学校では14人中9人が右上の群へと移動し、プラスの変容が見られた。

個別に支援した生徒の描画の変化を見てみると、(描画4)の生徒は、侵害認知群で両向(-)だったが、2回目は(描画5)で、満足群・空想E(-)と、変化した。(図3・4・5)文化祭で劇の役を務め、文化祭後のSGEで、まわりから認められたことが大きいようである。木の上の家で空想的だが、友人など人の数が増え、楽しい様子が窺われる。(描画6)の生徒は要支援群で、空想A(-)の攻撃的な絵だったが、個別面接や学年団の教員の声かけ、友達とのかかわりの中で、明るく友達と過ごすことが増えてきた。2回目は(描画7)で、空想D(-)になった。(図3・6・7)雲の上で現実逃避的な感じであり、今後も支援は必要だと思われるが、楽しい様子が出てきている。

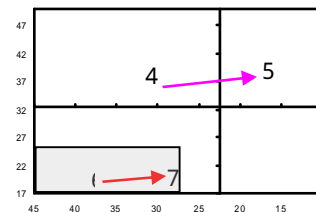


図3. Q-Uプロット位置



(描画4)

(描画5)

(描画6)

(描画7)

4 考察

Q-U、S-HTPを組み合わせる「生徒支援システム」を実施することにより、学級や生徒の実態把握、適応課題の発見ができ、支援することができた。そして、その取組の実施前後での変容を、組み合わせプロット図などで視覚的に見ることができ、学級経営の評価・検証に活用することができた。現場の先生方からは、組み合わせプロット図を見て、「支援を必要とする位置にいる生徒に対して、日常の自分の声かけが少ないように感じた。」や、学級の取組の中で「かかわりを多く持つこと」「活躍する場を作ること」「一緒に活動する時間を持つようにすること」を心がけた等、その後の取組に役立てていただいた。また、2回目の結果から、支援の成果が窺われたり、新たに問題を抱えたと思われる生徒の発見もあり、今後も生徒の実態把握に努め、支援していく必要性を感じた。

5 終わりに

今回、描画テストを初めて試みたが、一定の課題の中で描く絵には、その時の心理状態が表れており、実際にたくさんの描画を見ながら、生徒たちの心に触れることができたのではないと思う。教室の中では目立たない生徒が、内面で気になることを抱えていることを表現している絵を描き、意外な一面を発見したりもした。思春期の中学生の心理は変わりやすく、感じ方や物事の捉え方も変わるものであり、その変化に気づき、支援していくことが大事であると実感した。心のケアも含めた適切な生徒理解と学級の仲間作りのために、今回の研究は、様々な問題行動を予防する一つの手法になるのだと思う。実践研究でお世話になったA、B中学校の先生方の日々の指導や支援の成果を本研究から学ぶことができた。この一年間、さまざまな新しい発見や、今までの自分を振り返りながら反省、再確認することが多かったと思う。

ご指導いただいた高知大学医学部の加藤教授、近藤先生、医局のスタッフの方々、心の教育センターの先生方、そしてテストに協力していただいたA、B中学校の先生方や生徒の皆さんに感謝し、今後もこの研究を生かし、生徒たちとのかかわりの中で、実践を深めていきたいと思う。

表2 . S-HTPの分類

分類	プラス (+)	マイナス (-)
現実 家・木・人のみ描かれ構成に配慮がない。	3要素がばらばらに描かれている。小さく、硬さがある。空白が多い。 	<支援が必要> 省略や、塗りつぶしがある。輪郭がゆがんでいる。3要素がそろっていない。 
現実 家、木、人に付加物があり現実より構成に配慮がある。	現実よりも、柔軟さがある。まとまりがない。 	<支援が必要> 自己に不快な侵入がある。 不健康さがクローズアップされている。 
両向 構成的であり、適度な空想がある。	構成にまとまりがあり、課題の中で比較的自由的な表現が見られる。 	暗さや寂しさなどが感じられる。濃い影や塗りつぶしがある。 
両向 両向よりもバランスがとれ、自由な表現がある。	両向よりもバランスがとれたまとまりがあり、課題の中で、豊かな表現ができています。 	線が弱いなど、筆圧のバランスが悪い。 
空想 現実の課題より、夢・あこがれが表現されている。	個性を自由に表現している。空想を楽しんでいる。 	空想 (C) <支援が必要> 教示からの逸脱がある。素直に課題に取り組めない。 
空想 家・木・人が現実でなく、教示からのずれがある。	(A) <特に支援が必要> >攻撃性、破壊性、統制の不良が見られる。 	(D) <支援が必要> 孤独、逃避性がみられる。 


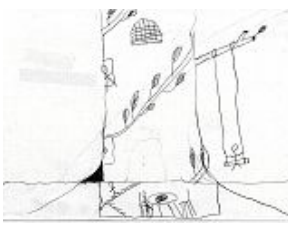
	<p>(B) <特に支援が必要> >未熟、混乱性が見られる。</p>		<p>(E) <支援が必要> 安全な場所を求め るように、地下や木 の中に家を表現し ている。</p>	
--	-----------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------

表3. 見取りと支援方法

分類	見取り	支援方法
<p>現実 プラス (+)</p>	<p>現実 教示に対して、真面目に反応する。 柔軟に対応できない。自発的に行動できない。 課題に対して、反応が硬く、自由さが無い。 現実への順応を優先させ、個性が出せない。 対人関係が広がりにくい。</p> <p>両向 課題に対して、柔軟に反応できる。適度な余裕や、遊び心がある。周りの雰囲気合った対応ができる。協調性や、自己表現力がある。 対人関係が豊かで、安定している場合が多い。</p> <p>空想 与えられた課題よりも、空想や欲求を優先させる。教示に対して、楽しんで反応している。 個性的で、豊かな想像力がある場合が多い。</p>	<p>コミュニケーションを大切にし、自己表現ができるように配慮する。 対人関係を円滑にするための場面設定を心がける。 保護的に安心できる場所を与える。</p> <p>現在は大きな問題を抱えている可能性は低い。 特別な支援の必要はないと思われるが、観察を心がける。</p> <p>個性をうまく引き出し、生かせる場面を工夫する。活動後に、自信をもたせるような評価の工夫をする。</p>
<p>マイナス (-)</p>	<p>現実 それぞれの分類された特徴の中で、何らかの問題を抱えているのが表現されている。 寂しく、暗く、重く、違和感がある。 抱えている問題には、浅いものから深いもの、一過性のものとさまざまである。</p> <p>両向 空想 (A)破壊、攻撃、衝動、コントロール不良の状態が見られる。目立たないが問題を抱えていることが伺える。 (B)未熟、混乱、幼稚な表現が見られる。 (C) 攻撃性を含まない教示からの逸脱がある。素直に課題に取り組めない。自己顕示性があり、自己の世界を持っている。 (D) 孤独、逃避性がみられる。神経質、寂しさを感じている。 (E) 安全な場所を求めるとともに、地下や木の中に家を表現している。ストレスを感じているためか……。</p>	<p>声かけを心がけ、個別に情報収集に努める。現実 (-)、空想 の生徒には、特に個別支援が必要。学校としてのチーム支援や、関係機関との連携も含めた支援なども考える。</p> <p>役割を与え、継続的な指導が必要である。すぐには、内省しにくく、様々な場面での励ましや声かけが多く必要。</p> <p>内省的であり、指導や声かけをすることで、変容しやすく、友達ができたり、役割を果たすことができるのでは……。自分の世界を持ち、人に左右されにくい。</p>

【参考文献】

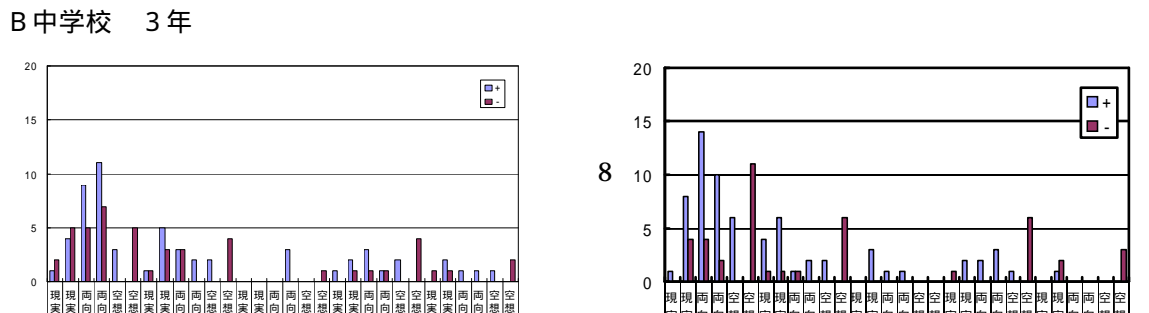
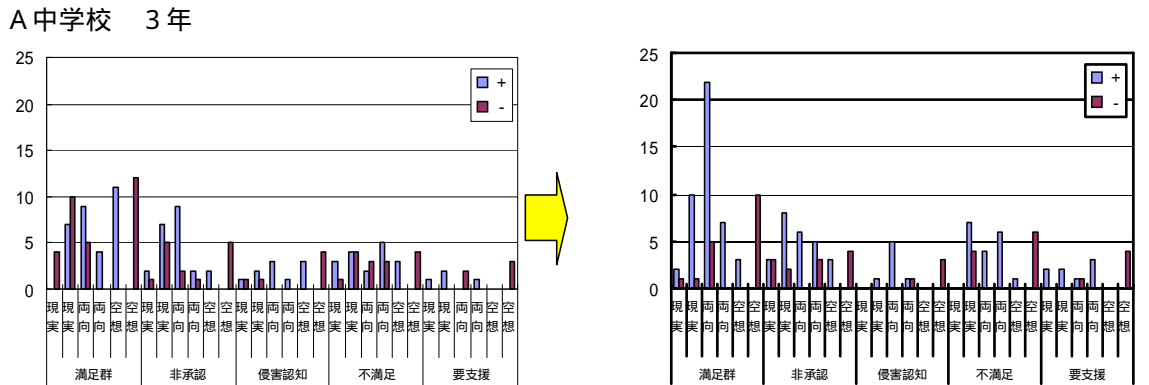
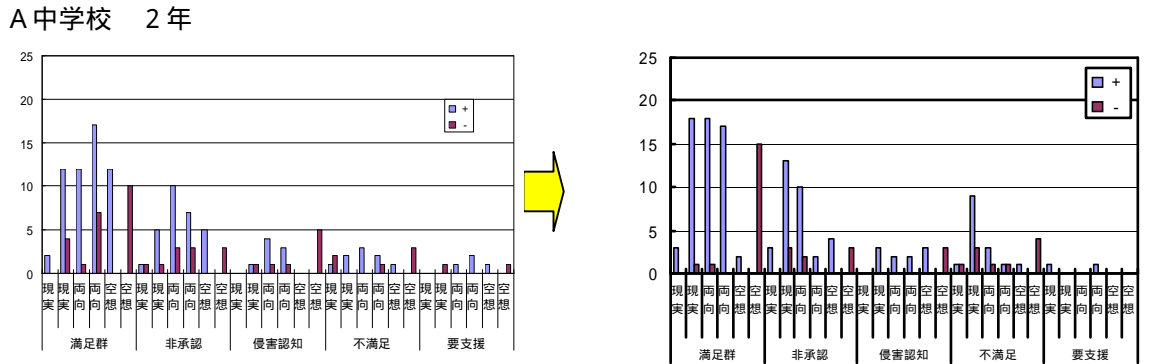
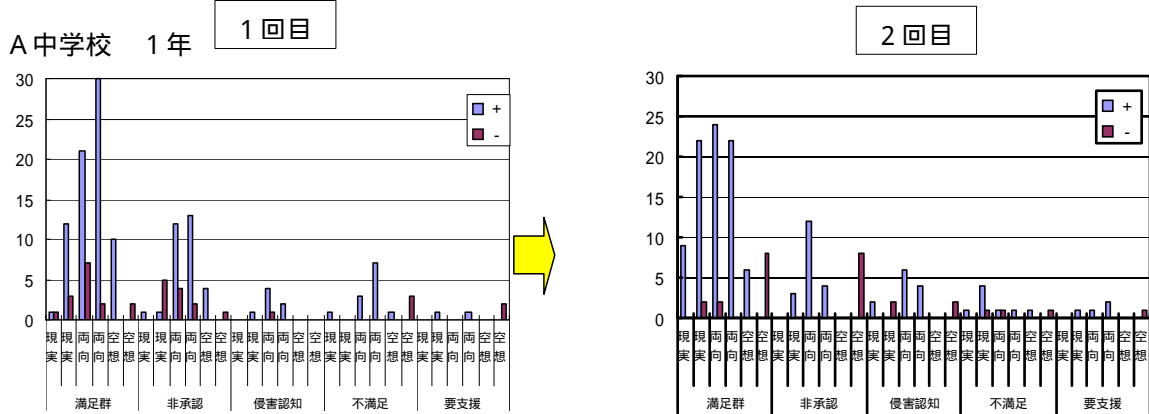
- 三上直子 「S-HTP法」 誠信書房(2001)
- 岩井寛 「描画による心の診断」 日本文化科学社(1990)
- 日本描画テスト・描画療法学会 「臨床描画研究」学校臨床と描画 金剛出版(2000)
- 河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳編集 「Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド」 図書文化(2004)

河村茂雄 「グループ体験による学級育成プログラム」 図書文化(2005)

國分康孝・國分久子監修、片野智治・明里康弘・植草伸之編集

「育てるカウンセリングによる教室課題対応全書 6 不登校」 図書文化(2003)

資料1. 学年別Q-U・S-HTP組合せ比較





資料2 . 組み合わせプロット図比較(各学年1学級例)

